

市民シンポジウム「次世代にどのような社会を贈るのか？」

趣旨説明および講演要旨
論考『人類が戦争をやめるための生物学』をめぐって

森中 定治（日本生物地理学会、放送大学埼玉 SC）

日本生物地理学会は、山階芳麿博士、黒田長禮博士ら当時の著名な鳥類学者の助力を得て、鳥類学者の蜂須賀正氏博士と東京大学理学部教授で生物地理学の第一人者であった渡瀬庄三郎教授によって昭和3年（1928年）に創設されました。同研究領域の学会としてはフランスに次いで世界で2番目です。蜂須賀正氏博士は、平成15年（2003年）の生誕百年記念シンポジウムにおいて“型破りの人”との評がなされました。自己の信念と哲学に基づいて戦争の世紀を駆け抜けた人でした。渡瀬庄三郎教授は、区系生物地理学における旧北区と東洋区の境界を示す“渡瀬線”によって著名であり、昨今話題になるジャワマンギースを移入しました。現在は特定外来生物として駆除の対象ですが、当時困っていた野鼠やハブの被害を防ぐために生物学の知識を社会に役立てようと積極的に行動した強いパワーの持ち主でありました。

日本生物地理学会創設者の人となりを考え、学問を専門家の枠に留めることなく、人類社会に直接活かしたいと思います。生物学に関する研究発表や正規のシンポジウムとは別に、生物学に限定しない無料一般公開の“市民シンポジウム『次世代にどのような社会を贈るのか？』”を開催するのはこのような理由からです。

生物学の原点は博物学と分類学にあります。16世紀に英国が世界を股にかけて版図を拓げました。見たこともない動物や植物を採集して標本にし、それを分類しました。たくさんの標本が集まってそれが分類されると、世界の動物や植物がある特定の場所を境にしてガラッと変わることがわかるようになりました。生物地理学は、その境界線を見つけ出し生物を地理的に区分をする学問として出発しました。生物地理学は、昨今の分子生物学の発展と相俟って現代における生物地理区だけでなく、生物の誕生以来の歴史を見出し、そして人類を含む生命の未来を見通す時空を超えた学問、言葉を変えれば過去から未来に渡る生命史を探求する学問“時空生物学”として発展途上にあります。

この市民シンポジウム『次世代にどのような社会を贈るのか？』は平成15年（2003年）に行われた蜂須賀正氏生誕百年記念シンポジウムに続いて平成16年（2004年）から始まり、今年の令和7年（2025年）まで2回の大会中止を挟み19回の開催となります。

近年のテーマを列記します。

平成29年（2017年）

対談「益川敏英著『科学者は戦争で何をしたか』をめぐって」

平成30年（2018年）

「森中報告『種問題とパラダイムシフト』をめぐって」

平成31年、令和元年（2019年）

「リベラル化する世界の分断」

令和2年（2020年）

新型コロナのために大会中止

令和3年（2021年）

『種問題（生物学）から見える人類の道』利他が人類を救う一相模原障害者殺傷事件を発端に、鬼滅の刃を切り口に」

令和4年（2022年）

講演 1 「利他性—自然科学と社会科学の架け橋として」

講演 2 「経済学における利己と利他」

令和5年（2023年）

「人類は戦争をやめることができるのか？」

令和6年（2024年）

『人類の生成と消滅』

上記のタイトルを見てお分かりいただけるように“人類”、“種問題”、“利己性・利他性”そして“戦争”がこのシンポジウムの大きな潮流となっています。

この市民シンポジウムでは令和5年（2023年）に「人類は戦争をやめることができるのか？」というテーマで開催しています。

人類は戦争をやめることができるのでしょうか？

私の持つその答えは「人類は戦争をやめることができる」です。

人間とは何なのか？

“人間の形”を知ることが人類が戦争をやめるための第一歩です。

“人間の形”とは！？

どういう形をしているのか？

それが論考『人類が戦争をやめるための生物学』（森中、2024）に記してあります。

https://biogeography.iinaa.net/morinaka_2024.pdf

戦争がなぜ起こるのか？

それは自分たち個人の生存が脅かされるという恐怖から、あるいは自分たちの生命が近未来に危うくなるという恐怖からです。生物は個々の個体の生命を未来に繋いでゆくことで成立します。自分たち個人あるいは自分たちの集団の生命が脅かされるからだと思えます。

生物は自分の子孫を残さなければ存続できません。生物学では“適応度”という概念を用いてこれを説明します。適応度とは自然選択を受けたときの有利さ、不利さを示す値であり個人が未来に自分の生命をつなぐ力、つまり成熟まで至った自分の子の数に帰結します。これを別の視点から見れば、利己性とも私欲とも言い得るでしょう。自分個人がこの世で生き抜くために有利に働くあらゆる力です。穏やかな人、他人に合わせる人、自己を強く主張する人、強烈な個性を持つ人、様々な人がいますがどのような人であっても人間（生物）であるので利己性を持っています。一方で“利他性”とは自分個人がもつ適応度を他人に与える行為を意味し、他人に自分の力を与えてその見返りが無い状態が続けば、自分個人は次の世代を生み出すことが難しくなり、いずれ消滅すると帰結されます。ゆえに利他的行為に見えても、その実は自分自身にあるいは自分の子孫にその利他的な行為の対価として何らかの利益が還元されているがゆえにその利他的行為が永続していると考えるのが一般的です。

では、自分個人への利益の還流とは無関係の“真の利他性”は存在しないのでしょうか？今までの我々人類の持つ知識や理論からは、真の利他性の存在を肯定する論理や結論は見つかっていません。真の利他的な行為、いわゆる人類愛とか無私の愛などと言われる事例は世界中で無数に見られます。けれども、現代の論理ではそれらが真の利他的行為であるとは帰結できません。たとえば突然変異で真の利他的行為を起こす遺伝子が生じることがあったとしても、自分の利益とは無関係の行為をさせる遺伝子が将来にわたって存続することはあり得ないのでは??というわけです。数式で考えても簡単です。自分自身の利益を生み出すための自分の持てるあらゆる力からその多くが引き算で消えていくなら、いずれ自分自身は消滅すると考えて不思議はないでしょう。だから利他的な行為は、結局は利己が変形した利他いわゆる擬似利他だと考えられます。

ですが「白いカラスはいないか？」という問いと同じで、人類の持つ既知の知識、既知の理論ではない今まで気付かなかった新しい理論が発見されることもあるかもしれません。「〇〇はない」という命題の証明はとても難しいのです。だから「真の利他性はまだ発見されていない」との表現になります。

私は人間の全ての個人が真の利他性を持っていることを見出しました。それが人間の生殖機構のなかに隠れていたのです。そしてそれを令和5年（2023年）の市民シンポジウムで発表し、進化学者や哲学者を含む多様な諸先生と議論をしました。その議論とメールのやり取りのなかで二つの難しい疑問が生まれました。そもそも有性生殖の仕組みゆえに自分のものではない遺伝子を育てる必要性が生じたと言えども、配偶者は何千万、何億もいる異性のなかの偶然の一人であり、自分の遺伝子を未来に継ぐため仕組みの中の副次作用（単なる制約）であり、実質的には無意味ではないか？そもそも生殖機構のなかの微細な機能が、なぜ社会のなかで人間の真の利他的行動に繋がるのか？

これらの質問に対する答えを考えたことが上記で示した論考（森中、2024）につながりました。特に最初の疑問は現時点ではこの論考を超えてさらに多様な思考につながりました。

まず私が強い関心を持っていた生物の種（しゅ）とは何かという問題と繋がりました。適応度はプラスにもマイナスにもそれぞれの個人（個体）に働くのです。では種とは何なのか？種とは“個体”ではないのか。ここまで来て初めて人間の形とは何か？が見えてきます。通常の一つの視点による論理では見ることはできません。二つの視点を持たなければ理解ができません。でもこれこそが人間の姿だろうと私は考えます。さらには対立遺伝子という視点です。例え何億人の中から一人の配偶者が無作為に選ばれてとしても、対立遺伝子は何億分の1ではありません。対立遺伝子は人の数だけあるのではなくもっとずっと少ないです。さらに自分が持っていないその対立遺伝子が自分自身にプラスに働く場合があります。なーんだ！結局自分個人の適応度が増加するのではないか！個人の利益に還元されるのではないか！

そうではありません。それは結果論です。自分にはない対立遺伝子によって自分の適応度が増加する場合も減少する場合もあります。交配の結果個人の適応度は上がっているのか下がっているのか！？環境が変化すれば適応度も変化します。当てになりません。個人の適応度の増減とは無関係なのです。間違いなくあるのは、自分と無関係の他人の遺伝子に自分の適応度を投入している（他人を育てている）ということだけです。“真の利他性”とは個人の適応度とは無関係なのです。さらに交配の時に遺伝子の組み換えが生じる場合もあります。それも対立遺伝子の場合と同じように、自分の適応度が増加

する場合も減少の場合もあります。普遍的なものは有性生殖機構それ自体です。有性生殖機構は利己的な仕組みでしょうか？それとも利他的な仕組みでしょうか？人間のもつ“身体の生物学的あるいは医学的な機能”の中で、真の利他的な機能が他にあるでしょうか？これは考えれば考えるほど面白い。この問い掛けをくださった進化学者に深く感謝します。

人間各個人はエゴイズムとも私欲とも言われる“利己性”を持っています。それは悪いことではありません。それどころか、それがなければ人類社会の秩序を保っていくことができないし、何より生物として存在することができません。生物としての存続のための第一究極因です。でも人間が持つものはそれだけではありません。“真の利他性”という第二究極因も持っています。私は有性生殖機構にそれを見出しました。これからの人類の未来を指し示す道標は、この第二究極因が大きな働きをすると私は考えます。人間はこの第一究極因と第二究極因が合わさった、言葉を代えれば利己性と真の利他性が合わさった存在だと、今は考えています。そして人間とはこの両者の合わさったものであるとの理解こそが、不可避とすら言われる人類の戦争に終止符を打ち、自然科学の発展によるさまざまな恩恵が人類に真の経済的な利益をもたらし、そしてその結果人類に平和がやって来て、またそこにこそ誰一人も見捨てられることのない社会、基本的人権が尊重される社会、適応度が大きく向上した過去的人类とは異なる新バージョンの人類になると、私は考えます。

現代は人新世と呼ばれますが、人新世はこの“人間の形”を理解するための時代であると、私は考えます。